

成果報告書

記入日 2018 年 2 月 3 日

氏名	山口 匠	渡航先国名	モロッコ王国	所属機関	スィディ・ムハンマド・ベン・アブドゥッラー大学
研究テーマ：イスラームの実践における時間的志向性に関する人類学的研究 —モロッコのスーフィズム再興現象に見る「伝統」の諸相—					
研究期間：2015 年 4 月～2017 年 7 月					
研究成果（概要）					
<p>「人々と伝統の関わり方を明らかにする」という目的のため、イスラームの実践、とりわけスーフィズムに関する諸実践の参与観察と聞き取り調査を行い、主要なインフォーマントのライフヒストリーを収集した。留学中に築いた人脈は、今後の研究にも大いに活かされるものと考えられる。</p>					
研究成果（詳細）					
<p>本研究の目的は、ムスリムが伝統との関わりにおいて、どのように未来を希求するのかを民族誌的に明らかにすることである。個々のイスラームの宗教的実践とそれを説明する語りの中で、どのような過去との繋がりがいかに立ち上がり、またその際に準拠される集団的枠組みは何かということに目を向け、人々の伝統との複合的な関係と、伝統の布置状況を考察する。とりわけ、「言説の伝統」としてのイスラームにおける伝統の複数性・複層性に注目するため、本研究はイスラームの近現代史においてひとときワコントロバーシャルな存在でありながら、近年のモロッコでは再評価の傾向が報告されているスーフィズムを対象とする。以上の目的のため、本留学中にはフィールドワークによる民族誌的データの収集と、関連するフランス語・アラビア語文献の渉猟を行った。以下で、調査地の紹介、調査の方法と経緯、調査結果を順に述べていく。</p> <p>報告者は、モロッコ北部内陸の都市フェズにあるスィディ・ムハンマド・ベン・アブドゥッラー大学人文科学学部博士課程教育センターに研究員として所属し、フェズからおおよそ 60km 東の隣町メクネスに居を構えて調査を行った。フェズとメクネスはそれぞれ「学問の首都」、「イスマール首都」とも呼ばれ、ともにモロッコの四大王都に数えられる古都である。様々な宗教施設が集まる両都市での調査は、本研究の目的に照らして最適であったと考えている。当初留学を予定していたカサブランカの大学から受入機関を変更したのは手続き上の成行きであったが、結果的にメインの調査地であるメクネスに加えて、フェズでも多くの知己を得、特に現地の同世代の比較宗教学の研究者たちと知り合うことができたのは僥倖であった。</p>					



本研究における調査の大部分は、宗教的実践の参与観察とインタビュー調査による。とりわけ重点的に対話を重ねたのは、ザーウィヤ・アマニーヤ・ガズィーヤ、アラウィーヤ・マグリビーヤ教団、ハマドゥシャ教団に属する人々であった。これら3つはいずれも、北アフリカに多く見られるシャーズィリーヤ系の道統に連なるスーフィー教団であり、メクネス市内や近郊にある各教団のザーウィヤと呼ばれる修行場を訪れて種々の儀礼に参加し、またICレコーダーを片手に関係者に話を聞いて回った。この他にも、現在モロッコで影響力を増大させているカーディリーヤ・ブードシーシーヤ教団を始めとする多教団の関係者や、スーフィズムとは距離を置く穏健派、湾岸諸国のサラフィー主義に影響を受けスーフィズムを敵対視する人々、さらには宗教的な事柄には興味がないと自認する者まで、機会ある毎に様々な志向性の人々に、スーフィズムやイスラーム一般に関する意見の聞き取りを行った。

こうした調査は、とにかく現場へ足繁く通い、様々な人的ネットワークを介して人を紹介してもらうことで可能となった。しかし個人間の繋がりを辿る中東的な人間関係において、調査のための人脈の構築は決して容易に進んだわけではなかった。とりわけ留学の一年目には、モロッコで広く通用するアラビア語モロッコ方言の習得に加えて、宗教事象を扱うことから正則アラビア語の強化の必要性を痛感し、実地のコミュニケーションと新聞や教科書等のテキストを用いて語学力の向上に励んだ。曲がりなりにも調査が進展するようになったのは、報告者自身の信仰上の立場が変化したことが影響している。2016年2月にイスラームへの入信を決意したのは、必ずしも研究のためばかりではないが、異教徒のモスクへの立入を禁じるマーリク法学派が支配的なモロッコでは、調査遂行上、このことが大きな意味を持ったのは事実である。入信後しばらくは礼拝等の儀礼的作法やクルアーンの読誦などを、知識としてではなく身体で覚えることに専念し、その後は、調査一年目には研究者として観察していたヒジュラ暦のサイクルをムスリムとして生きることとなった。現地語を操る妙なアジア人学生からモロッコのイスラームを学ぶ改宗者への立場の変化は、調査対象の拡大を可能にし、その過程で上述のスーフィー教団の面々とも交流を持つようになった。

スーフィー教団のメンバーシップは時に曖昧で、誰がどういう地位にいるのかが判然としないことも多いが、以下では基本的に、始祖のシャイフの子孫やザーウィヤの管理人など、教団の中心に近い人々を念頭に置いて調査結果の報告を行う。第一に言えるのは、少なくともこうした人々に限れば、スーフィズムとはイスラームの本道を歩むことであり、模範であるシャイフの教えに従うことがその実践に当たるということである。毎夜ザーウィヤに集い、奨励行為とされる追加の礼拝や宗教詩の朗誦などの勤行に励む少人数のサークルこそが、各教団の活動の核をなしていることが見て取れた。彼らとの会話の中でしばしば耳にしたのが、教育を意味する「タルビーヤ」という言葉で、スーフィズムの霊的教育によって、敬虔なムスリムとしての倫理と振る舞いを身に着けることができるとされる。

だがモロッコのスーフィズムの歴史を繙けば、こうした言説が強調されるようになったのは比較的近年のことで、先に触れたブードシーシーヤ教団の躍進が少なからず影響しているものと考えられる。そして教団によっては、一般のムスリムからは概して「ビドア」、すなわちイスラームからの逸脱と目されがちな要素をなおも含んでいる。ここで取り上げたいのは、ハマドゥシャ教団のハドラと呼ばれる儀礼である。ハドラは狭義には楽器の演奏を伴う賛美詩の朗誦であるが、多くの場合には精霊の憑依儀礼として機能することから、モロッコ社会における同教団の悪評の原因となっている。これは約半世紀前のクラパンザーノの研究の時代から変わっていないと言えるが、メクネス近郊にある中央ザーウィヤの関

係者もこの点には意識的であり、それに対する彼らの戦略はハドラに用いられる音楽や詩を、モロッコの伝統芸術としてパッケージすることであった。2016年7月には「ハマドゥシャ芸術祭」が催され、大々的なステージが組まれると同時に、ハマドゥシャの宗教詩をメルフーンと呼ばれるモロッコの口語詩の伝統に位置づけるシンポジウムなども企画されていた。こうした場では、ハドラにおいてトランス状態に陥るジドバという現象に話題が及ぶと、それはイスラーム以前から北アフリカに存在した古い慣習の残存であるとか、より直截的には「理性の病」として扱われ、本来のハマドゥシャのハドラからは切り離すようにして論じられる。一年を通して憑依儀礼や始祖の墓廟への参詣を求める人々が絶えず訪れる同地であって、こうした努力がどれほど成功しているのかは疑問だが、少なくともローカルなスーフィズム(的)実践の再ブランド化の試みとして評価できよう。

次に、各教団に共通して指摘できることとして、アクターとしての国家のプレゼンスの高さが挙げられる。現在のモロッコでスーフィズムへの関心が高まっている背景には、国王を中心とする公的なエスタブリッシュメントが、サラフィー主義への対抗軸として内外への「モロッコのイスラーム」の喧伝に注力しているという事実がある。ここでの「モロッコのイスラーム」とは、「アミール・アル＝ムミニーン(信徒たちの長)」たる国王、アシュアリー神学派、マーリク法学派、そしてスーフィズムという四つの要素によって構成される。こうした状況にあつてスーフィー教団の側もまた、積極的に国家への恭順を示している。もちろん、個人のレベルでは教団の活動に対する公的援助の欠如に対する愚痴などがこぼれることもあるが、同時に「愛国心は信仰の一部である」などの言明もよく耳にした。毎年、為政者への忠誠は、王位継承を記念する祝日「イード・アル＝アルシュ(王座の日)」に更新されるが、例えば上記の「ハマドゥシャ芸術祭」もこの祝日に合わせて開催されたという事実からも、教団側の意図を見て取ることができる。

この国家との関係という問題において、調査中、一つの大きな問いが生まれた。それは、近代国家が要請する市民的主体、あるいは権威主義的体制が統治の対象とするそれと、スーフィズムのタルビーヤを通じて形成が目指される倫理的主体とでは、どのような違いがあるのだろうかということである。例えばザーウィヤにおいて気候変動などの環境問題が議論される時、我々はそこに環境保護の道義的責任を唱える近代的主体を見るべきであろうか。それとも、深刻な問題の裏に隠された神の意図を読み取ろうとする神秘主義者を見るべきであろうか。今後、こうした問題に照らして、改めて先行研究の精査と理論的整理を行いながら収集した個々のデータを検討し、博士論文として民族誌を執筆していく。

以上の点に関して現時点では、「清浄／不浄」の二項対立を巡る古典的人類学理論を通して考察してみることが、一つの有効なアプローチとなるのではと考えている。従来、イスラーム研究においてこの問題系は、もっぱらイスラーム法における儀礼的な清浄と不浄の分類システムの解明として展開してきた。しかし、「信仰は清潔さより来る」などといった標語に表わされるように、イスラームの規範は一般的な公衆学的清潔さにも大きな価値を置いている。とりわけ日常の会話において、目に見える混沌の様子が「汚い」と言い表される時、しばしば責任の欠如や信仰の不徹底への非難の意が込められている。公共と宗教、外見と内面が交錯するこの次元において、「ザーヒル(顕れたもの)」と「バーティン(隠されたもの)」の区別を重視するスーフィーがどのような解釈を行うのかという問題に、今後追加調査なども行いながら取り組んでいきたい。

留学中の生活・研究でのトピックス

留学期間中には様々な出会いに恵まれた。これは留学に同行してくれた妻に負うところも大きく、彼女の存在は報告者が集めることのできたデータの性質にもいくらか関わっている。というのも、研究者ではない彼女に典型的な人類学的フィールドワークのように長期のホームステイをさせる訳にはいかなかったため、報告者の調査には「密度」の上での限界があったかもしれない。だ



2016年12月 ハマドウシャのザーウィヤにて

がその反面、まだ子供のいない若い夫婦という過渡的な立場のために、家庭のプライベートな空間へ招かれることも多く、これは単身男性の調査であったら男女隔離の規範が強いムスリム社会では困難であったことだろう。とりわけ、妻の食への情熱が少なからず作用して、結果的に我々はメクネスとフェズのそれぞれに義理の父母同然の存在を持つこととなった。

そして現地の方々との交流の傍らで、異国の地での同胞の日本人との繋がりを心強く感じることもしばしばであった。特にフェズ及びメクネスの JICA 駐在隊員の方々との出会いは、生活上の不満を共有できたばかりでなく、2016年4月に開かれた「フェズ - 京都文化交流祭」での「日本人から見たモロッコ、モロッコ人から見た日本」と題されたシンポジウムにパネリストとして参加する機会も与えてくれた。

また、日本語を独学で学んでいた一人の女学生との出会いについても記しておきたい。我々夫婦と彼女の間で始まった週一回のランゲージ・エクスチェンジはその後、彼女が所属するムーレイ・イスマーイール大学での日本語・日本文化クラブの設立へと発展し、2016年末からの約半年間、夫婦ともどもボランティアとして大学内の初級日本語クラスの講師を務め、日本料理の教室も不定期で開いた。このクラブ活動がきっかけとなり、同大学で「日本とモロッコの文化的・文明的比較」と題したアラビア語での特別公演を行った。同クラブは我々の帰国後も活動を継続しており、特に日本語クラスは受講生を増やし、現在では初級2クラス、中級1クラスに拡大したと伝え聞いている。

今後の社会貢献

留学期間中、特に一年目の2015年には、イスラームの名を冠した痛ましい事件が世界中で相次いで起こった。幸い、滞在中にモロッコでこの手の事件が発生することはなかったが、こうしたニュースが流れる度にモロッコの人々も皆一様に胸を痛めていた。日本国内でもイスラームへの関心が良くも悪くも高まる中において、ムスリム社会の中で暮らす機会を与えられた者



2017年4月 日本料理教室で巻き寿司を作る様子

として報告者に出来る恩返しは、実際の人々がどのようにイスラームを生活しているのかを、単なる護教論となることなく冷静に伝えることであろう。従って本留学で得られた成果及び今後の研究の進展を発表し続けること、そして学術の世界のみに自閉せず、機会が許せばより広く一般の読者向けにも発信を行うことが、報告者に可能な最大の社会貢献であると考えている。まだまだ力不足ではあるが、今後も一層の研鑽に努め、多くの方々からの恩を少しずつでも返せて行ければ幸いである。